

吉田茂と澤田美喜

大津 隆文

十一月下旬あるバスツアーに参加した。行き先は大磯の旧吉田茂邸と澤田美喜記念館。この二人は戦後しばしば耳にした有名人で、その実像に多少は接することが出来るかと個人的な期待もあった。

旧吉田邸は広壯な公園のような敷地に位置し、改築・増築を重ね、国際的な会合、多人数のパーティにも対応しうる豪邸であった。「銀の間」と呼ばれる氏の居室は一方に机、もう一方に寝台が置かれた部屋。それだけ見ると机とベッドの狭いわが居室と同じと思った。もちろん広さやしつらえは全然違うし、何よりも寝台に横になると氏の大好きな富士山を眺めることができた、というのは羨ましいと言つほかない。

吉田茂氏は総理大臣として「ワンマン」と呼ばれ、当時は子供だった自分も記憶に残っている。中でも大磯の自宅に通じる道路を優先的に整備し「ワンマン道路」と揶揄されたことや、国会で質問者にバカヤローと発言し結局「バカヤロー解散」に至ったことは印象的で、独善的とのイメージがあつた。

しかし客観的に見ると、戦後の混乱期の総理として新憲法の制定、サンフランシスコ講和条約の締結、日米安全保障条約の調印など新生日本の枠組み、進路を決める上で大変大きな貢献をされた人物との評価が広がつてている。

澤田美喜記念館では彼女が収集した隠れキリストンの史料が大量に展示されていて興味深かつた。中でも「魔鏡」には驚かされた。一見通常の銅鏡のように見えるが、光を反射させると十字架上のイエスの像が現れるのだ。何という精巧な細工かとただただ感心した。

澤田美喜氏は三菱の創業者岩崎弥太郎氏の孫娘、外交官澤田廉三氏と結婚してクリスチヤンに改宗、戦後いわゆるG.I.ベビー救済のためエリザベス・サンダース・ホームを設立、約二千人の世話をされたという。その熱意、実行力には敬服するほかない。

二人とも戦前の上流階級の出身で、その恵まれた財力や人脈が人格の形成、さらには社会への使命感とその達成にもプラスしていると感じた。